

佐藤春夫文学に見る多文化共生社会
—『美しい町』を例として—

台湾大学教授 范 淑文

竹村牧男氏は、「共生学」の課題と展望」という文の中で、共生について定義を下し、「全世界の一元的な支配は終焉して、地球的にも地域的にも多元化した社会になり、それゆえにさまざまな局面で、抑圧や差別、支配や攻撃、侵食や侵害、不公平・不平等、等々の問題が顕在化し、これらの問題に真剣に対処しなければならなくなってきたということがあろう。」とあるように、多元化した共生社会を構築するとともに生じる問題点を述べている。

氏の見解に従えば、その多元化の共生社会（もちろん経済や文化、価値観などさまざまな面が含まれる）では、それぞれ個々の文化や価値観などが尊重されるべきであることはあ改めていうまでもない。言葉を変えれば、その社会で生活している人々にとっては幸せに思い楽しく生活できる空間と考えられ、それを実現することが社会全体、または個人の最終目的であると言えよう。幸せに、かつ楽しく生きられる社会——あるいはユートピア同然の理想像——の構築は何も今日に始められたものではない。時代を遡っていけば、中国の陶淵明の『桃花源記』にそうした社会の原点を見出すことができよう。日本の場合に至ると、例えば、ユートピア小説が一つのブームであった時期に創作した佐藤春夫の『美しい町』は、ユートピア構築の意図のもとで考案された作品と思われ、一種の多文化共生社会の青写真の試みと捉えられよう。とは言うものの、その多文化共生社会の構築において、上掲した竹村氏が指摘した「全世界の一元的な支配は終焉し」たか、また「抑圧や差別、支配や攻撃、侵食や侵害、不公平・不平」などの問題が解決されたか、などは疑問である。

よって、小論では竹村牧男氏の「共生学」説に基づきながら、佐藤春夫『美しい町』に構築されている「美しい町」は多文化共生社会として成り立っているか、という問題に焦点を絞り、問題の解明を試みてみる。